

地域のための景観マネジメント研究 WS 第1回勉強会：2008.9.24(土木学会)
討議内容の記録

日付： 9月 24日 (水)曜日, ディスカッション時間： 13:00 ~ 15:00

オーガナイザー・司会者名(所属)：田中 尚人 (熊本大学)

パネリスト：羽藤 英二 (東京大学) 松島 格也 (京都大学)

【午前中の講演を受けて】(敬称略)

■デザインとは

羽藤：ベトナムの話が出たが、今までやってきたような土木計画学的なアプローチが、必ずしも適当ではないのではないか。

マネジメントとプランの違い。マネジメントをやっている人は線を引かない、絵を描かないメッセージを発する、という段階がまずあって、そのあとマネジメントということになるのではないか

■マネジメントの日本語

田中：マネジメント・プラン・デザインは日本語になりにくい。マネジメントって何？

松島：人々が自立的に動くとは限らない。洗脳？ナビゲート？コントロール？する主体が必要なことは確か。これは、制度設計ともいえる。

松元（熊大学生）：マネジメントとは、羽藤先生の言っている「プログラム」？

羽藤：そう思っている。松島先生のものとは、想定しているスケールが違うのかも知れない。

討
議
内
容

■マネジメントのオーナーは誰か

上田（東大）：プランとプログラムについて。プログラムとは段取りである。マネジメントとは、事前に、こうなったらこうする、というルールを作っておくことである。どちらも誰かに依頼されてやること（オーナーに指示されて監督している）である。この場合、地域のオーナーは誰か、景観は誰のものかという問題がある。つまり、この問題において、オーナーが明確でない。その可能性を持つのは、地域の人だけであるか、あるいは観光客や来ない人もそうであるのか？

田中：地方自治体の、オーナーシップが不在のところがある。ところが、小国町。オーナーシップがあるところでは、結果として、美しい景観を獲得している。

松島：自治体はマネジメントだけをすればよい。サービス水準を決めることが仕事である。

田中：各主体の役割が認識されているかどうか。道後の例に関して言えば、デザイナーは与えられたデザイン条件を疑うこと

羽藤：マネジメントがすべきこと

マネジメントの精度が低い、マネージャーの動きが悪い。ということはあるかも。

マネージャーのスキルが低い、等、すべてが緩い、ということか。

■専門家として

田中：お二人は、マネージャーになりうる立場、どうしたら脱却できる？

羽藤:相手のことを知ることであり、しかしそれは同時に自分の専門を弱体化させると考えている。拠り所は…町を見る、人の行動を知ることであり。

マネジメントも表現も理解できる人というのは、強い専門性を放棄させることになる(研究者としては…)

マネジメントを行う役割の受け皿としては、大学というのは考えられる。

松島:理論を実践してみたいというものはあるが、それをマネージャーとしてやるか、というと、それは無理だ。一つの部分について、ということならあり。

■事例に学ぶ

出口(宮大):日向市で中心市街地活性化に参画している(10年ぐらい前から)

羽藤先生の講演の中で、「景観十年、風景百年、風土千年」という言葉に感じ入るものがあった。しかし、スケール(エリア)と時間軸を分けて考えていく必要があるのではないかと。

また、事業が達成すべき目標について、議論がなかった気がする

10年のマネジメントの成果は、今の技術で計量できるのではないかと。

(羽藤先生:景観というより風景の話をしてしまっているかも)

■地域に適切なインフラのあり方

田中:九州は、中山間地域等マネジメントやデザインのしかたが全く違う。それは、インフラを作ってきた経緯に関係しているのではないかと。国土レベル→都市レベル→地域レベルと行くべきだったが、実際は都市レベルまでであった。地域レベルのインフラは、近世のインフラを引きずっている。

羽藤:この半世紀、数値で計算してきた。今までは、歴史性を汲み取る、ということがなかった。これについて、欧州は違うのではないかと考えている。歴史からの展開があったのではないかと。今後、マネジメントに求められるのは(数値ではなく)そういうところではないかと?

■まちづくりの主体

佐々木(九工大学生):地元の市民活動支援をしていたが、マネジメントに学術経験者が年に数回来る程度である。地域張り付きの“コーディネーター”的役割が必要なのではないのか?コーディネーターとは、仲人、調整?つなぎ役?とも言える。(いずれにせよ、地域の主体ではない)

田中:景観だけをマネジメントすることはできない、というのが1点

職能として、様々な立場の人たちがどう組むのか、が1点

■生業の失われた風景の再生

宮下(八千代エンジニアリング):生業の破綻した風景を考えていてはどうしようもない。マネジメントというのは、継続することではないかと。誰が、どの役割を担いながら継続していくか、制度設計と言っていいのか、方法が明らかでない。

羽藤:現在までの交通計画は、実際その通りになっておらず、持続性がなかった。

マネジメントは、実践していく、その風景の中で生業を見出していき、ということが主になるのではないかと。そのための制度設計は必要だろうけど、何か答えがある、ということではないと思う。

松島：誰がどこまで、について。

主体はその地域の人でしかありえない。何か計画しようというときに、実際に動く人。

学識経験者が主体になるか、というと、そうではないと思う。

貢献する、ということはあるけれども、責任をもってやり遂げる、ということではないと思う。

■景観マネジメントの射程

藤倉：上田先生がおっしゃったマネジメントについて。デザインをマネジメントするのか、そこからの波及効果をマネジメントするのかを考える必要がある。

景観を考えることは、公共性を考えること、ということ。

地域を理解するための実証的な研究が必要である。

上田：オーナーについて

この議論の場合、オーナーとは今生きている人だけではない、これから生まれてくる人もオーナーであり、引き継ぐオーナーは文句を言えない。（双方のコミュニケーションが成り立たない）価値を引き継いで、引き渡す、という概念の欠如が問題である。

佐々木（早稲田）：そういったものは、経済学で測ることができるのか？

松島：できないこともないが、正しいかどうかは検証しようもない。

佐々木：共通言語として扱うということ。

出口：歴史も生活もない、ということになると、マネジメントの意義がない。

■マネジメントの射程

藤井（東工大）：国，都市，町，・・・は生き物。だから，プランニングできない。デザインできない。マネジメントは動的である。現象の動態・動学性をとらえようというのがマネジメント。一方、他人が情でできることはなにか？近代において、精神と風土（土地）との分離が問題である。

田中：松島さんの言ったコミュニケーションと、藤井先生の言うコミュニケーションの違いがある。ピタパのコミュニケーションと命のコミュニケーションということである。

佐々木：個人的な価値観と、フィジカルな（マクロな）前提がある。

命・情のコミュニケーションを可能にする、インフラの整備、という観点が必要では？

羽藤：数字で表さないと見えない。ということもある。

■まちの「手当」

田中：まちのお医者さんとよく言われるが、「手当」と「術」があると思う。「術」には数字も必要なんじゃないか。あと、「手当」には、心意気というか、思いが大切。

上田：測る（佐々木先生の話を受けて）というのは、システムを外側から眺めて成り立つことである。地域の人が望んでいることをやるのが善か？いやでもやるべき、という役割も必要なのではな

いか. 景観マネジメントでも, そういう役割があるのではないか.